

赤谷プロジェクト19年度の取組み

赤谷森林環境保全ふれあいセンター

全国的に暖冬といわれた今年の冬、赤谷の森でも本格的な雪を待ちながら3月となり、マンサクの花が咲きはじめました。

毎年この時期には、プロジェクト全体の方向性を決定する企画運営会議が開催されます。今年も3月5日に開催され、18年度の事業報告と19年度の事業計画が話し合われました。そこで、今回は企画運営会議の内容を元に赤谷プロジェクト全体の様子をご紹介します。

一、プロジェクトの枠組み

赤谷プロジェクトの活動全体を見ると、生物多様性復元研究事業、環境教育事業、情報発信事業、フイ



NACS-Jの田畑理事長のご挨拶で企画運営会議が始まりました



プロジェクト4年目の春が始まります

ルド管理事業の4つの事業に大別できます。それぞれの事業には、活動内容ごとに中核3団体（地域協議会、日本自然保護協会、関東森林管理局）で議論する場や専門家が加わり調査・研究する場として、WG（ワーキング・グループ）が設けられています。現在、このWGはテーマ毎に7つ設置されています。生物多様性復元研究事業には、植生管理WG、猛禽類モニタリングWG、ほ乳類モニタリングWG、溪流環境復元WGの4つがあり、環境教育事業には、環境教育WG、地域づくりWGの2つが、フィールド管理事業には、フィールド利用マネジメントWGが活動しています。



早春の法師沢、水源の森です（エリア3）

そして、この多方面にわたる7つのWGを取りまとめ、科学的な観点からの方向性を示す機関として自然環境モニタリング会議があります。なお、情報発信事業については、WGではありませんが中核3団体が連携して実施しています。例えば、3月には赤谷ふれあいセンターが事務局となり、プロジェクトの広報誌「赤谷の森だより」を発行しました。こちらの方もよろしくお願ひします。

二、具体的な活動

活動の単位であるWGの概要は以下の通りです。既に「関東の森林から」で紹介しているものもありますのでご参照下さい。

植生管理WG（「関東の森林から」28号、29号、32号参照）
人工林を天然林へ戻すための試験地の設定など、生物多様性に資する森林について検討。
猛禽類モニタリングWG（「関東の

森林から」35号参照）

大型猛禽類の行動圏や食性などを調べ、森林との関係を把握。

ほ乳類モニタリングWG

中小型ほ乳類の暮らしを調べ、森林との関係を把握。

溪流環境復元WG（「関東の森林から」34号参照）

エリア内で実施される治山事業について、溪流の連続性が図れるよう検討。

環境教育WG（「関東の森林から」29号、30号、31号、33号参照）

児童、生徒や一般市民を対象にした環境教育プログラムの立案と実践。地域づくりWG

地域住民による水源の森の整備や、赤谷の森の歴史の調査など地域とプロジェクトの繋がり強化を推進。

フィールド利用マネジメントWG
プロジェクトエリアの利用に関するルールの検討。

このように、19年度の活動としては、毎年のデータの積み重ねが重要であるモニタリング関係のWGでは、粛々と活動を続け、今回の企画運営会議で新たに設置された地域づくりWGが地域とプロジェクトとの繋がりを強化する活動を始めます。さらに、広報誌の定期的な発行などプロジェクトからの情報発信を進めていきたいと思ひます。
（赤谷森林環境保全ふれあいセンター）